

## 有賀千代吉とバチエラー八重子

——立教小学校所蔵のアイヌ民具資料からみえるもの——

横島 公 司

### はじめに―発見の経緯

立教学院史資料センター（以下、資料センター）は、立教小学校の創設に深く関わった有賀千代吉に関する資料を収蔵していることで知られる。

資料センターが収蔵する「有賀千代吉関係資料」（以下、有賀資料）は、大別して（一）昭和戦前期カナダで刊行されていた邦字新聞および雑誌、（二）第二次世界大戦時、カナダが設置した日本人収容所（有賀も拘留されていた）に関する資料、（三）極東国際軍事裁判（The International Military Tribunal for the Far East）で訴追されたA級戦犯（及び容疑者）との書簡・揮毫、以上三類で構成されている<sup>1)</sup>。有賀がこうした資料を残

した経緯であるが、それは有賀自身の人生遍歴に因る所が大きい。一九二〇（大正六）年、立教大学商科を卒業した有賀は、その後カナダ・バンクーバーへと渡り、同地で新聞記者そして子供達の教育に従事していた。案外、有賀自身、在外邦人として同地で一生を終えることも考えていたのかもしれない。しかしアジア・太平洋戦争の勃発は、そんな有賀の運命を大きく変えることになった。有賀はカナダ当局に拘禁され、収容所へと送られたのだ<sup>2)</sup>。日本への帰国を余儀なくされた有賀は<sup>3)</sup>、敗戦後、英軍の通訳をしながら日々の糧を得ていた。

そんな有賀をふたたび立教へと導いたのが佐々木順三である。昭和二三（一九四八）年一月、佐々木は有賀に立教小学校設立への協力を要請したのである<sup>4)</sup>。こうし

て有賀は、立教小学校初代主事として、一九五八（昭和  
三三）年からは松下正寿の後を受け第三代校長として、  
草創期の立教小学校のために奮闘したのであった。<sup>5)</sup>

昭和四四年、有賀はふたたび日本を離れることを決意  
する。その理由は判然としないが、有賀はアメリカへと  
旅立ち、一九八七（昭和六二）年、同地で客死するの  
である。

### 「有賀コレクション」——アイヌ民具との出会い

離日の際して、有賀は立教小学校に多くの史資料を残  
していった。「文書」類、「書簡」、「物品」など、あまり  
に多様であるこれら史資料群を、筆者は仮に「有賀コレ  
クション」と名づけている。

二〇一五年春、筆者は立教小学校を訪問した。第一の  
目的は戦犯たちと有賀、立教小学校との関係をさらに調  
査することにあつたが、その一方で「有賀コレクショ  
ン」の調査も念頭に置いていた。わけでも、立教小学校  
で自校史編さんを担当されている遠山章夫教諭より「立  
教小学校はアイヌ民族の資料を所蔵している」と聞かさ  
れていたため、もしそれが事実ならば、どういった資料  
であるのか、その実態を確かめることも目的の一つで  
あつた。

遠山教諭にその旨を伝えたところ、アイヌ資料を管理  
しているという石井輝義教諭を紹介される。石井教諭に  
案内され、筆者が目にしたものは紛れもなく、アイヌ民  
族が日常または祭祀に用いる衣類、什器や小刀、<sup>イカバネ</sup>酒箸な  
どの道具類（以下、アイヌ民具）であつた。しかも一点  
や二点ではなく、かなりの数にのぼつていた。

驚きはそれだけに止まらなかつた。石井教諭による  
と、これらアイヌ民具は、バチエラー八重子のもらし  
い、というのである。バチエラー八重子に関係するアイ  
ヌ資料が東京に存在しているということは、もちろん筆  
者には全くの初耳であつた。<sup>6)</sup>

そもそも、都内でアイヌ民具を収蔵する教育機関はご  
く僅かなのである。にも関わらず、これほどまとまった  
点数が立教小学校に所蔵されていた事実自体、すでに衝  
撃的なのだが、その上、バチエラー八重子が関係するこ  
とが本当に確かなら、文字通り「新発見」の可能性さえ  
あつた。

### I. 「昭和35年度博物館実習報告（Ⅴ）」

もつとも、これらアイヌ民具が筆者の新発見ではない  
ということ、すぐ明らかとなつた。すでに半世紀以上  
も以前に、立教大学の手で調査が行われていた事実が判

明したためである。

その調査記録は、「昭和35年度博物館実習報告(v)」(以下、「実習記録」という、見開きで横書き二頁ほどの文書として収められていた<sup>(7)</sup>)。題目から判断するに、学芸員課程の実習の一環として行われた調査であったのだろう。この表題だけでは、具体的な調査内容まで判断が付かない。「立教小学校収蔵アイヌ民具の整理」という個別タイトルまでたどり着いて、はじめてこの「実習記録」の重要性に気が付くことが出来るのだ<sup>(8)</sup>。

タイトルから、この調査が行われたのが一九六〇(昭和三五)年、今から五十年前のことであったことがわかる。つまり半世紀以上の長きに亘り、おそらく殆ど人目に触れることのないままであったこの「実習記録」が、アイヌ民具について調査・記録された唯一の資料ということになる。従って調査開始にあたってはまず、この「実習記録」を精査することからはじまった。

## II. 「実習記録」の内容

はじめに「実習記録」の詳細についてみていくことにしよう<sup>(9)</sup>。長文にわたるが、引用する。

立教小学校収蔵

アイヌ民具の整理

栢田益子 落合美代子  
佐藤 公俊 寒川 泰寿

昭和35年度、民俗資料整理法の実習は、宮本教授指導の下に12月1日、10日、19日の3日間、立教小学校において同校収蔵のアイヌ民具について行われ、収蔵台帳・基本カード・分類カードの作成、写真撮影、資料計測などを実習した。この整理の結果、いづれ同校から目録が刊行されることになったが、取敢えず収蔵アイヌ民具の内容を、以下に紹介しておくこととした。

実習経過

陳列ケースから資料を出して教室に運び、まず資料に番号をつける。転送は総計63点あった。ついで個々の資料について所蔵台帳の記入を行った。所蔵台帳の記入には、資料についている説明や、金田一京助・杉山寿栄男共著「アイヌ芸術」全3巻(第一青年社、昭和17年刊)などを参考にした。

収蔵台帳の記入項目は、次のごとくであった。

収蔵番号

原名

訳名

標準名

採集地

採集者・寄贈者

測定

ただし、材料・分布・由来・備考などの項目についても記入したものである。

1日の実習のおかげで、要領がわかったので、仕事はスムーズに運び、19日午後5時頃には殆ど片附いてしまった。

この資料整理は、番号をつけ資料収蔵台帳に記入するだけではなく、資料基本カード・資料分類カード・資料附票にも必要事項を記入せねばならない。そこで収蔵台帳をもとに前期の2枚のカードと附票に記入する作業を12月20日に自宅で行うことにして、3日間の資料整理法の実習は終わった。(史学科3年)

立教小学校収蔵のアイヌ民具目録

- 1 玉頸飾り tamasai
- 2 玉頸飾り tamasai
- 3 玉頸飾り tamasai
- 4 山丹錦小袖 Manchukosonte
- 5 切伏文衣服 chikarkarpe

- 6 切伏文衣服 chikarkarpe
- 7 切伏文衣服 chikarkarpe
- 8 木綿刺子衣服—
- 9 切伏文手甲 tekunpe
- 10 細縄帯 ponkut
- 北海道有珠郡伊達町有珠 向井八重子 採集
- 11 鹿皮沓 yukkapkeri
- 12 小刀鞘 saya
- 13 小刀 makiri
- 14 刀鐔 seppa
- 15 刀鐔 seppa
- 16 刀鐔 seppa
- 北海道有珠郡伊達町有珠 向井八重子 採集
- 17 矢筒 ikayup
- 北海道有珠郡伊達町有珠 向井八重子 採集
- 18 太刀肩掛 emushi-at
- 北海道有珠郡伊達町有珠 向井八重子 採集
- 19 手杓 nisutekeiyutani
- 20 堅白 ashu-nisu
- 21 捏鉢 nima
- 22 捏鉢 nima
- 北海道新冠郡新冠村泉 米沢錦一 採集
- 23 調理用木篋 pera, hito-pera

|   |   |             |                  |
|---|---|-------------|------------------|
| 2 | 4 | 黒塗四脚丸形行器    | kemaush-shintoko |
| 2 | 5 | 酒箸          | iku-pashui       |
| 2 | 6 | 酒箸          | iku-pashui       |
| 2 | 7 | 酒箸          | iku-pashui       |
| 2 | 8 | 酒箸          | iku-pashui       |
| 2 | 9 | 酒箸          | iku-pashui       |
| 3 | 0 | 酒箸          | iku-pashui       |
| 3 | 1 | 天目台         | ukusup           |
| 3 | 2 | 南部椀         | itanki           |
| 3 | 3 | 南部椀         | itanki           |
| 3 | 4 | 天目台         | ukusup           |
| 3 | 5 | 南部椀         | itanki           |
| 3 | 6 | 天目台         | ukusup           |
| 3 | 7 | 南部椀         | itanki           |
| 3 | 8 | 天目台         | ukusup           |
| 3 | 9 | 南部椀         | itanki           |
| 4 | 0 | 南部椀         | itanki           |
| 4 | 1 | 南部椀         | itanki           |
| 4 | 2 | 金蒔絵黒塗耳盥     | kisarush-patchi  |
| 4 | 3 | 金蒔絵黒塗耳盥     | kisarush-patchi  |
| 4 | 4 | 金蒔絵黒塗耳盥     | kisarush-patchi  |
| 4 | 5 | 黒塗注口形酒器     | etunup           |
| 4 | 6 | 金蒔絵黒塗蓋付円筒容器 | puta-un-patchi   |

|   |   |                |                  |   |   |    |
|---|---|----------------|------------------|---|---|----|
| 4 | 7 | 黒塗合子形行器        | puta-un-patchi   |   |   |    |
| 4 | 8 | 黒塗四脚丸形行器       | kemaush-shintoko |   |   |    |
| 4 | 9 | 朱塗三脚容器         | —                |   |   |    |
| 5 | 0 | 朱塗三脚丸膳         | —                |   |   |    |
| 5 | 1 | 黒塗曲物丸形行器       | shintoko         |   |   |    |
| 5 | 2 | 木製角盆           | nima             |   |   |    |
| 5 | 3 | 木製角盆           | nima             |   |   |    |
| 5 | 4 | 削花木幣           | sopa-inau        |   |   |    |
| 5 | 5 | 花筵             | inauso           |   |   |    |
| 5 | 6 | 花筵             | inauso           |   |   |    |
| 5 | 7 | 金蒔絵黒塗盥         | shintoko-emko    |   |   |    |
| 5 | 8 | 編袋             | saranip          |   |   |    |
| 5 | 9 | 子負繩            | pakkaitara       |   |   |    |
| 6 | 0 | 荷負繩            | tara             |   |   |    |
| 6 | 1 | 荷負繩            | tara             |   |   |    |
| 6 | 2 | 荷負繩            | tara             |   |   |    |
| 6 | 4 | アイヌ風俗絵巻(1巻12図) |                  |   |   |    |
|   |   | 北海道有珠郡伊達町有珠    | 向井八重子            |   |   |    |
|   |   |                | 採集               |   |   |    |
| 3 | 5 | 1              | 2                | 1 | 9 | 以上 |

### Ⅲ. 「実習記録」の分析

「実習記録」を読み進めていくなかで、まずこの調査

主体が立教大学学芸員課程であったこと、そして博物館法の実習として宮本馨太郎教授（立教大学文学部）の指導の下、調査が行われたことが判明した。その一方で、アイヌ民具の具体的な来歴については触れられておらず、また調査を行うに至った背景、経緯などについても記されていない。そのため、「誰がなぜ、こうした調査を行おうと思ったのか」、「アイヌ民具の存在をいつ、どのように知ったのか」といった点などは不明なままであった。

一方、目録部のアイヌ語表記については特段誤りはみられない。おそらく登録時、宮本氏から懇切な指導がなされたものと推測される。また目録のところどころに、向井八重子という名が現れる。はたして調査者は、向井八重子という人物がアイヌの歌人、そして聖公会の伝道師としても名高いバチエラー八重子であるということを意識していたであろうか（ちなみにこの当時、バチエラー八重子はまだ存命である）。いずれにせよこの記述は、立教小学校所蔵のアイヌ民具がバチエラー八重子由来のものとして立証するうえで、非常に重要な手がかりとなると考えられた。

「実習記録」によれば、この時点で確認されているアイヌ民具は六四点。資料にそれぞれ番号を付与し、写真撮影を行った後、資料に添付されていた情報等に拠りな

がら、収蔵台帳を作成したとある<sup>10)</sup>。

しかし大きな問題は「実習記録」作成時に撮られた写真（ネガ・ポジ）や、収蔵台帳のいずれも、（現時点では）残っていないことであった。また資料に付与されていたはずの番号についても、半分以上が散逸しており、「実習記録」との照合作業が難しい状況に陥っていた。この点についてはアイヌ研究者に協力を仰ぎながら、出来るだけ早期に照合をすすめる必要がある。

また、そもそもこうして調査されたアイヌ民具が、なぜこの後、半世紀以上にわたって世に知られないままふたたび眠ることになったのか、という疑問も残る。

「実習記録」には、「いずれ同校から目録が刊行されることになった」とある。しかし管見の限り、こうした目録が発刊されたという情報には接していない。「封印」された理由は現時点では不明というよりないが、あるいは当該期における日本社会のアイヌ文化の理解度の問題、端的にいえば「時代の制約（限界）」ということかもしれない。また調査主体が学芸員課程における実習であったという点も、学術的な関心を喚起しなかつた理由として挙げられるかもしれない。いずれにせよ、一度は目録刊行の計画がありつつも、何らかの理由で「宙に浮いた」ということなのである。

しかし強調しておかねばならないのは、この「実習記

録」が遺されてなければ、現在の我々がこのアイヌ民具の詳細を知るすべはもはや全くなかった、という事実である。それゆえ筆者はこの「実習記録」の資料的価値が非常に高いと考えるのである。

#### Ⅳ．バチエラー八重子と立教・聖公会との関係

本節では、バチエラー八重子の生涯を確認しつつ、立教との関係についてみていくことにする。

一八八四（明治一七）年六月一三日、八重子は北海道伊達町有珠に生を受ける。戸籍名は向井八重子（幼名はフチ）、父は向井富蔵（アイヌ名モコッチャロ）、母はフッチセ、弟が向井山雄である。

八重子は七歳のとき、イギリス出身の聖公会宣教師、ジョン・バチエラー<sup>(12)</sup>から受洗を受ける。一一歳の時、父富蔵が死去。一三歳で八重子は、ジョン・バチエラーを頼って札幌に出て、アイヌガールズスクールに通っている。その後上京し、東京聖ヒルダ神学校<sup>(13)</sup>で学んでいる。八重子の上京と聖ヒルダ神学校への入学に関しては、聖公会の宣教師であるジョン・バチエラーの経歴が大きく影響しているのであろうが、いずれにせよこの時点で、八重子と聖公会との関係が生れたことは確かだ。その後、八重子は有珠聖公会勤務の伝道師（バイブル・

ウーマン）の資格を得る<sup>(14)</sup>。

一方、弟の向井山雄については、八重子よりも立教学院と直接的な関係がある。山雄は姉と同様に上京し立教中学校へ入学しているのである。このことを伝える新聞記事が、以下のようなものである。

【一九二二、四、五 北夕】

土人の優等生

東京市京橋区明石町の立教中学校にては今回同校生徒九十六名の卒業式を挙行せしが優等生中にアイヌ一名あり東都の中学に於てアイヌ学生を収容し居るは同校が嚆矢なり此アイヌは本道有珠郡伊達村七十番地生れ向井山雄（二二）といひ去三九年三月札幌創成中学校を二年間修了し同四月二八日上京して同校へ入学せしが品行方正に学科の一般も好成绩なれば模範生として頗る評判好き方なりしと<sup>(15)</sup>

その後山雄は立教大学文科へと進学し、聖公会牧師の資格を得ている<sup>(16)</sup>。

このように、八重子はもちろん弟の山雄も、意外なほど立教と関係が深いことがわかる。当時差別の対象であったアイヌの少年を受け入れた「嚆矢」が立教であったという事実は、もう少し知られて良いと思う。一方何故立教中学校が山雄を受け入れたのか、その経緯は不明であり、この点についてはいずれ稿を改めて検討したい。

一九〇六（明治三九）年、八重子は正式にバチエラーの養女となる。二二歳のときである。八重子とバチエラー夫妻が交わした養子縁組契約書には、次のような「契約」がなされていた。

「（養父母の布教の）精神ヲ承継シテ同胞ヲ救ハン事ヲ生涯ノ勤メト為シ且ツ之ヲ永遠ニ伝フル事」<sup>87)</sup>  
事実、八重子は、養父との契約を守り、信仰心に基づき「同胞」を救うための生涯を送るのである。

一九〇八（明治四一）年、ジョン・バチエラーについてイギリスに行き、カンタベリー大主教から伝道師として任命される。ここで八重子はアイヌについて講演し、強い反響があったとされる。帰国後、八重子はバチエラーと共に平取や幌別、一九一二（明治四五）年にはサハリンで伝道活動を行いながら、日々を過ごすのだが、太平洋戦争の勃発が八重子の運命を大きく狂わせることとなった。養父ジョン・バチエラーはイギリスに帰国してしまったのである。<sup>88)</sup>

戦時中、八重子は向井姓を名乗っている。養女とはいえ、バチエラーという外国人の姓を名乗ることは極めて難しい時代であったためだ。敗戦後、「晴れて」八重子はふたたびバチエラーと名乗るが、彼女を待っていたのは長きにわたる貧困生活であった。<sup>89)</sup>

こうしたさなか、八重子のもとを有賀が訪問するので

ある。

## V. 八重子と有賀の接点

現在、有賀が八重子のもとを訪れた経緯を伝える資料が残されている。有賀が聖アンドレ同胞会誌『VISION』に寄せた「バチエラー八重子さん」（全五回）という手記である。<sup>90)</sup>

有賀は、バチエラー八重子という人物を知る経緯を、次のように述べている。

丁度一昨年の夏であった。北海道札幌に於て、基督教々育同盟の総会が開かれ、私も出席す可き一人であった。然し余りに実面から見て利する所の小さい主の会合に出席するため、二三十万の金が費やされる事を悔しく思い、アイヌの生活資料を得るために、それだけの金を投じる事にして、会の方は欠席したのであった。小さな○政に苦しんでいる私には、そんな考え方も、しなくてはならないのであるから、なさけないといえそうかもしれない。そこで札幌郊外において福祉事業をやっている米沢君に尽力方を願ったのであった。その結果新冠辺のアイヌから貴重な資料が集ってきたのであるが、長い伝道生活を終えて引退している老婦人の生活が余りに



も惨めである、ということから、何とかしてその婦人を救う方法はないか、と考えたあげく、若し所持しているアイヌの資料を譲って貰うことが出来るならば、それに対して謝礼を出すことによって、一部の解決が出来るのではないかと思ひ、その婦人向井八重子さんに手紙を送ったのであった。これが私と向井（バチエラー）八重子姉と通信を始めた最初であつた<sup>240</sup>。

このように有賀に八重子の間には、幾度もの手紙のやり取りがあつたようだ。有賀に「北海道行に私の決心をさせたのも、この崇高な老婦人の手紙に接したから」であつた<sup>241</sup>。つまり有賀は八重子に一度も会うことのないまま、八重子のもとを訪れていたのである。

ところで、この有賀の手記には大きな欠落が一つある。八重子の邂逅がいつなされたか、肝心の日時が記載されていないのだ。現状では「一昨年の夏」という記述から、おそらく33年の夏と類推するよりない<sup>242</sup>。筆まめな有賀であるが、彼の文章にはときどきこういつた「抜け落ち」があつて、この点とても面白い。

いずれにせよこの手記によれば、有賀はもともとアイヌ民具の買取について関心を抱いていたようだ。そのうえで札幌近郊の米沢氏に協力を仰いだ（「実習記録」にある米沢錦一氏とは、この米沢氏のことを指す可能性が

ある）。そして有賀は、苦しい生活を送っている「老婦人」八重子の話を耳にして、八重子にアイヌ民具の譲渡を提案したというのが、立教小学校が所蔵するアイヌ民具資料の来歴であるとみてよい。

ちなみに、有賀が八重子からアイヌ民具を引き取ったことに關して、「実父から伝えられている家伝の羽織などを手放すことは非常に辛かつた」<sup>243</sup>と、有賀の行為をやや懐疑的に受け止めている叙述も見受けられる。しかし一方で、有賀の手記からは、有賀の訪問を八重子がたいそう喜んでいたことが伝わってくる。

「こんな立派な部屋（洞爺湖のホテル万世閣―筆者）に泊めていただいたいて、先生にもお会いできてわたしほんとに嬉しいんです」

ほんとに嬉しいらしかつた。私にはそれにもまして、よるこんで貰えたことが嬉しかつた<sup>244</sup>。

もちろん筆者も、有賀の行為をすべて肯定的に、全面的な善意だと捉えているわけではない。八重子が、自らのアイヌ民具を手放してしまったことを、残念に思わないはずはない。そういつた点も踏まえ「アイヌ民具を引き取ろうと考へた」有賀の意図がいずれにあつたのか、より明確にする必要があると考へている。

しかし一方で、東京からやつてきた都会人（有賀）が、田舎の老婦人（八重子）を「小学校にかよう児童へ

の教育に役立てたい」という名目で懐柔し（安撫で）手に入れた、といった見立てについても、いささか懐疑的なのである<sup>80</sup>。交通手段も今ほど発達していないこの時代、逢った事もない老婦人を訪ね、わざわざ北海道まで赴いた労力に見合うだけの「打算」や「利」が有賀にあったとは思えない。そもそもアイヌ民具を骨董目的で手に入れたかったのだ、と想像するにしても、最終的に有賀は日本を離れる際、それらを全て手放している。また有賀と八重子は同じ信仰を有する「同胞」という紐帯で結ばれていたことも考慮すべきであろう。

何より、八重子は有賀へ宛てた書簡のなかで「おことはり申し上げましたのにたくさんのお金子やいろいろお心つくしの品」を送る有賀に対し、感謝の言葉をつづっているのである。おそらく有賀は、アイヌ民具に関する金銭的処理を終えた後も、様々な形で、八重子への援助を私的に続けていたと考えられる。そして八重子も、こうした有賀からの厚意を受け入れ、その後の関係を継続していたのである<sup>81</sup>。

以上のことから筆者は、有賀がアイヌ資料を購入した意図は、金銭で購入する形をとることによる八重子の生活補助にあったと思量する。

一方で、教材費としての購入であったならば、あまりに大きな金額ではかえって不自然となるであろう（そも

そも有賀の一存で購入が可能なのか、という問題もある）。あるいは受け取って貰い易くするため、そうした「方便」を八重子には伝えたのであって、実際は有賀が「自腹」で捻出したのかもしれない。この点に関しては、現段階では推測の域を出ない。

以上が、立教小学校に保存されているアイヌ民具について、現時点で判明した限りの経緯である。結果からみると金銭で引き取っているため、厳密には「寄贈」という表現は適切ではないのかもしれない。しかし少なくとも、アイヌ民具が立教小学校にあることの理由については、これで一応の説明が付けられるだろう。

### おわりに

これまで見てきたように、立教小学校に保存されていたアイヌ民具資料の過半は、有賀千代吉がバチエラー八重子から譲り受けたもの、という来歴があきらかとなった。

その後、アイヌ民具資料は、立教大学の学芸員課程において一度調査が行われたのち、半世紀以上の「眠り」に付いたのち、今日の「再発見」に至ったわけである。

まず始めに半世紀以上に亘って資料を保存してきた立

教小学校、そして今日まで継承してきた石井教諭、さらに遠山教諭をはじめとする立教小学校関係者の努力によって、このアイヌ民具資料は「奇跡的」にこの世に残り得た、という事実を記しておくべきだろう。

筆者は、このアイヌ民具資料は、三つの観点から重要な意義があると考える。

まず第一は「アイヌ文化を後世に伝えるための貴重な文化財」である点、第二には「バチエラー八重子とジョン・バチエラー、立教学院、聖公会との関係を示す資料」である点、そして第三には「有賀千代吉という人物を検討するための重要なエピソード」でもある点である。

アイヌ文化、アイヌ民族をめぐって異様な言説が飛び交う昨今、アイヌ文化を伝える資料が発見されたという事実そのものの重要性については言を俟たないだろう。

またバチエラー八重子が、有賀を通じて聖公会そして立教学院とつながっていた、という事実が持つ意味は決して小さくない。今後、戦後の立教学院史を多面的に深化させるため、こうした点の解明は欠かすことが出来ない重要な観点と言えるだろう。

そして有賀千代吉が立教学院に果たした役割を位置づけるうえで、「有賀コレクション」の全容解明が必須である、ということが改めて浮き彫りに出来た点も大きな

前進であった。そのためには、有賀という人物をより深く理解することが不可欠でもある。今後はこうした点を念頭に置きつつ、研究をさらに深めていきたい。

最後にこのアイヌ資料を後世に伝えていくためにも、今後は、立教学院史の研究を担う資料センターが主導的に小学校と連携し、かつ高度な専門性が求められるため、アイヌ研究者の協力を適時仰ぎながら調査をすすめていく手順が重要となる。こうした点を踏まえ、筆者は立教小学校と密接に協力・連携しながら、「実習記録」と資料との照合作業をすすめている。

#### 註

(1) 有賀千代吉関係資料の詳細については、拙稿「有賀千代吉関係史料」『立教学院史研究』九号（立教学院史資料センター、二〇一二年）を参照のこと。なお、有賀とA級戦犯との関係については、いまだ多くの点が不明なままである。しかし伊達宗浩（立教大学総長室長、当時）が、有賀との対談のなかで「当時日本人の怨嗟の的だった戦犯の人達を巣鴨の刑務所に足繁く慰問されている面倒をみられた」とをさりげなく語り、有賀の思いを尋ねている。こうしたことから、有賀の活動は秘密裏に行われたものでは無いとみてよい（日本を去る有賀先生に聴く）『立教』第五一号（立教大学、一九六八年）、三三頁。

(2) 収容所での有賀の日々については、有賀千代吉『思い出乃形見』（有賀千代吉・有賀信江一九六六年）が詳しい。

- (3) 有賀は第二次交換船での帰国者である。帰国者リストのなかに有賀の名が残されている〔JACAR「アジア歴史資料センター」Ref: B202032890500、大東亜戦争関係一件／交戦国外交官其他ノ交換関係ノ日米交換船関係第七卷〔AT70〕〔外務省外交史料館〕〕。
- (4) 有賀の招聘は、小川徳治教授（学生部長）を経て、その後佐々木が二度にわたって有賀を「口説いた」という経緯であったようだ（有賀千代吉編『立教小学校十年史』〔立教小学校、昭和三十一年〕、一三〇―四頁）。有賀が最終的な決断に至ったのは「あなたも立教の出身者であるのですから、この際母校のために決心していただきたい」という佐々木の言葉と（同右、一四頁）、ポール・ラッシュの「いま日本は、これからの国を背負っていく立派な国民を教育するために大事な時期だ。日本をほんとうに民主主義にするにはクリスチャン・デモクラシー以外にはないんだ、お前は自分がクリスチャンだと思ってるなら、立教に行つて小学校をやれ」という言葉であったという（前掲「日本を去る有賀先生に聴く」、三〇頁）。なお、昭和三年の段階で、有賀とポール・ラッシュが親密な関係であったことも確認できる点でも貴重な証言である。
- (5) 松下正寿は一時期、立教大学総長と立教小学校校長を兼職していた。
- (6) カラフトアイヌ研究者である田村将人氏（札幌大学特命准教授）より「アイヌ研究者のなかでも、そうした事実は全く知られていない」といふ教示頂いた。
- (7) 『昭和35年度博物館実習報告（v）』『MUSEION 立教大学博物館研究』NO. 7（立教大学博物館学講座、一九六二年）、一二八―一二九頁。
- (8) この「実習記録」を半世紀ぶりに「発見」したのも石井輝義教諭である。
- (9) 本稿ではこの記録を「資料」と見做し、ほぼ全文を引用することにした。この「実習記録」は「アイヌ研究者の間でも全く知られていない」（田村将人氏）といふ教示を頂いたためである。また「実習記録」を読みすすめていくにあたって、田村氏からはアイヌ文化・アイヌ語等について助言を頂いている。
- (10) 二〇一五年一月現在、資料のなかにそうした「添付情報」は確認できていない。何らかの事情で散逸した可能性もあるが、詳細は不明である。
- (11) バチエラー八重子の略歴作成にあたっては、ジョン・バチエラー『ジョン、バチエラー自叙伝 我が記憶をたどりて』（文録社、一九二八年）、仁多見巖『アイヌの父 ジョン・バチエラー』（楡書房、一九六三年）、仁多見巖編『ジョン・バチエラーの手紙』（山本書店、一九六五年）、掛川源一郎『バチエラー八重子の生涯』（北海道出版企画センター、一九八八年）。バチエラー八重子『若きウタリに』（岩波書店、一九八九年）、仁多見巖『異境の使徒―英人ジョン・バチエラー伝』（北海道新聞社、一九九一年）、仁多見巖、飯田洋右訳編『わが人生の軌跡―ステップ・バイ・ザ・ウェイ』（北海道出版企画センター、一九九三年）、黒田格男・大島直行・古原敏弘・小川正人『資料紹介 伊達市噴火湾文化研究所所蔵のジョン・バチエラー関係資料（1）』（北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要（12）（北海道立アイヌ民族文化文化研究センター、二〇〇六年））などに拠った。
- (12) ジョン・バチエラー（John Batchelor、1854-1944）。イギリス聖公会の宣教師。来日後、北海道へと渡り、その後半世紀以上にわたってアイヌ民族に対し、キリスト教布教を行った人物として知られる。ジョン・バチエラーについて、有賀は次のように叙述している。「先

- 生が日本に来たのは明治十年三月一日でであった。それは築地の居留地であった。ここで北海道行のアイヌの帆船オーシャンペール号に乗ったのが同十年四月四日のことであって、函館には英人ウィリアム氏が居たからであった」(有賀千代吉「バチエラー八重子さん」(2)『VISION』30号(日本聖徒アンデレ同胞会、一九五八年))。
- (13) 香蘭聖書学校は現在の香蘭女学院である。
- (14) 前掲『バチエラー八重子の生涯』、三七―三八頁。前掲『若きウタリに』、一八四頁。
- (15) 社団法人北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会編『アイヌ史 資料編4(社団法人北海道ウタリ協会、一九八九年)、七八―一頁。なお北タとは北海タイムスの略称である。
- (16) 『若きウタリに』では、山雄の経歴を「立教大学神学部出身」と記述しているが、これは誤りである。
- (17) 八重子とジョン・バチエラーとの養子縁組契約書については、前掲『若きウタリに』一二九頁、前掲『バチエラー八重子の生涯』、頁、前掲『我が記憶をたどりて』、頁などの記述を参考にした。
- (18) ジョン・バチエラーは、一九四四年にイギリスで死去している。ジョン・バチエラーに関する類書では、敵性外国人として「強制的に帰国させられた」という説と、「自らの意思で帰国を選んだ」という二つの説が混在している点を指摘しておきたい。
- (19) 養父バチエラーが日本を離れる際、三万五〇〇〇円のお金を残していったというが、それはたちまち使い果たしてしまったという(前掲『バチエラー八重子の生涯』、二〇一―二〇三頁)。
- (20) この資料の存在を筆者にご教示くださったのが石井教諭である。
- (21) 有賀千代吉「バチエラー八重子さん」(4)『VISION』32号(日本聖徒アンデレ同胞会、一九五九年)。なお、原文書の印刷状態によ
- り判読不能と判断した文字を○と表記した。
- (22) 有賀千代吉「バチエラー八重子さん」(最終回)『VISION』33号(日本聖徒アンデレ同胞会、一九五九年)。
- (23) 有賀の校長就任が三年なので、おそらく校長に就任した年の夏に訪問した、と考えるのが自然であろう。
- (24) 前掲『バチエラー八重子の生涯』、二二五頁。八重子がいう家伝の羽織というのは、「調査報告」アイヌ民具目録No.4「山丹錦小袖 Manchukosone」を指す可能性がある。またこの山丹錦小袖については、いわゆる「蝦夷錦」の可能性も指摘できる。
- (25) 前掲「バチエラー八重子さん」(最終回)。
- (26) 有賀は八重子に五〇〇〇円という金額を提示したと『バチエラー八重子の生涯』は記している。しかし同書でも明確な出典表記がなく、有賀の手記にも具体的な金額が明記されていない。
- (27) 八重子是有賀に宛てた手紙のなかで、次のように語っている。  
(略) 老ばが二ツの品を有ってましてそれをよいねにうれそうならかっていただき来る冬の為にワタ入れをつくって着たいと申ておられますか二三千なら手ばなすらしからこれもお入り用でしたら荷つくっておくり申すがよろしいでしょうか  
(『バチエラー八重子書簡(一)』(立教小学校収蔵))

図1 切伏文手甲 (tekunpe)

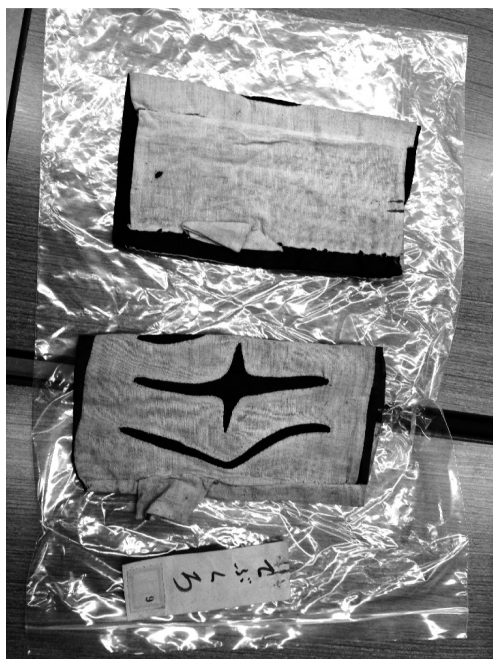


図2 子負繩 (pakkaitara)

